

戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」③

—青森県選出の国会議員像—

藤本 一美

<総目次>

- I、戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」①
（『専修法学論集』第 127 号）
- II、戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」②
（『専修法学論集』第 128 号）
- III、戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」③
 - 第 1 章、田澤吉郎と津川武一
 - 1、はじめに
 - 2、田澤吉郎
 - ① 出生・経歴
 - ② 県会議員・衆議院議員
 - ③ 農林大臣・防衛庁長官・国土庁長官
 - ④ 政治家「田澤吉郎」
 - 3、津川武一
 - ① 出生・経歴
 - ② 県会議員・衆議院議員
 - ③ 医師、文学者としての津川
 - ④ 政治家「津川武一」
 - 4、おわりに

<注>

*参考文献

- 第 2 章、熊谷義雄と島口重次郎
 - 1、はじめに
 - 2、熊谷義雄
 - ① 出生・経歴
 - ② 水産・漁業界の「天皇」
 - ③ 衆議院議員
 - ④ 政治家「熊谷義雄」
 - 3、島口重次郎
 - ① 出生・経歴
 - ② 県会議員
 - ③ 衆議院議員
 - ④ 政治家「島口重次郎」
 - 4、おわりに
- (注)
- *参考文献

第 1 章、田澤吉郎と津川武一

1、はじめに

田澤吉郎は、戦後青森県の保守政治家を代表する一人である。田澤は 1918 年 1 月 1 日、青森県南津軽郡田舎館村の諏訪堂に生まれた。東奥義塾中・東奥義塾高校を経て、早稲田大学の政治経済学部を卒業した。田澤は、津島文治・元青森県知事の娘婿であり、1947 年、29 歳の若さで青森県議会議員に初当選、これを三期務め、39 歳で県会議長に就任した。

1960 年には、「津軽のケネディ」を名乗って衆議院議員・総選挙に青森旧第二区から立候補して初当選、以来 12 回連続当選を果たした。この間、衆議院・議院運営委員長、自民党国会対策委員長、国土庁長官、農林水産大臣、および防衛庁長官などを歴任している。

田澤は、自民党内では宏池会(池田勇人→前尾繁三郎→大平正芳→鈴木善幸→宮澤喜一派)に属し、1992 年には、宮沢派(宏池会)の会長代行を務めている。1996 年の衆議院・総選挙で、年齢などを理由に比例代表東北ブロックに回され、当選不可能な下位に登載され落選、これを機に政界を引退した。

田澤は、衆議院議員時代、「田澤一竹内」という県政界の一方の雄として君臨するなど、大きな影響力を行使した。また政治活動のかたわら、教育面にも貢献、東奥義塾理事長、弘前学院大学長に就任している。2001 年 12 月 12 日、食道癌のため弘前大学医学部附属病院で死去、

享年83歳であった¹。

これに対して、津川武一は、戦後青森県の革新勢力を代表する政治家の一人である。津川は1910年8月2日、南津軽郡五郷村（浪岡町）で出生、小作人の子どもとして育った。旧弘前中学校を経て、旧制弘前高等学校に進む。1930年、東京帝国大学医学部に進学、在学中に日本共産党に入党、治安維持法違反の容疑で逮捕、起訴された。大学から退学処分を受けたものの、「転向」を表明して執行猶予付きの有罪判決を受けた。その後大学へ復帰、医学部を無事に卒業した。

津川は敗戦後、郷里の青森県に舞い戻り、共産党の再建活動に参加した。党の活動とともに、地域医療の充実にも尽力、医療生協の運動を発展させ、健生会病院院長も務めている。また1960年代初頭、ポリオの生ワクチン輸入の時には、先頭にたって活動した。

津川は小説も執筆する「文人」として知られており、1955年には、小説『農婦』が読売新聞小説賞佳作入賞、『過剰兵』がサンデー毎日大衆芸賞に入選した。津川は、日本民主主義文学同盟の弘前支部の中軸として後進を育て、故郷の先人・葛西善蔵の顕彰に尽力している。

津川は1963年県議会選挙に出馬・当選、これを2期務めた。また2期目の途中の1969年、衆議院・総選挙に青森旧第二区から立候補・当選した。東北地方の最初の日本共産党の衆議院議員として、1986年に引退するまで通算5期衆議院議員を務めあげ、りんご産業振興、農林水産の分野で活躍した。1988年9月4日死去。享年、78歳であった²。

本章の目的は、第一に、戦後青森県の保守勢力を代表する政治家の一人で、いわゆる「田一竹時代」の一翼になった田澤吉郎（自民党）を取り上げる。第二に、戦後青森県の革新勢力を代表する政治家の一人として津川武一（共産

党）を取り上げる。“保守勢力”と“革新勢力”とが鋭く拮抗する中で、180度立場の異なる政治家がどのような政治活動を行い、党の勢力拡大のために尽力したのかを検討する。

2、田澤吉郎

① 出生・経歴



(1918年1月1日～2001年12月12日)

既に述べたように、田澤吉郎は1918年1月1日、豪農で村の指導者であった田澤周助となほの11男として、青森県南津軽郡の田舎館村諏訪堂に生まれた。1931年、父の母校であった東奥義塾中学・高校を経て、1940年、早稲田大学の政経学部政治学科に入学した。戦争の激化に伴う学徒動員で大学は、1943年に繰り上げ卒業している。そこで郷里に戻り、父の意思を継いで農業を始めた。軍に応召されたものの、前線に赴くことがないまま終戦、除隊して故郷に帰った³。

田澤は戦後の1947年、県会議員選挙に出馬して当選、これを3期務め、1957年、39歳の若さで県会議長に就任した。1960年の衆議院・総選挙では、青森旧第二区から出馬して当選、以後11回連続当選した。この間、国土庁長官、防衛庁長官、農林水産大臣、首相臨時代理を務めた。自民党内では、池田勇人・元首相の宏池会に所属、後に派閥を継承した。

政界引退のきっかけは、1996年10月の衆議

(年表)

- ・ 1918年1月1日 青森県、南津軽郡田舎館村諏訪堂に生まれる。
- ・ 1937年3月 東奥義塾高校を卒業。
- ・ 1943年9月 早稲田大学政経学部政治学科を繰り上げ卒業。
- ・ 1943年10月24日 金木町津島文治の娘陽と結婚。
- ・ 1946年10月 村の青年団長に就任
- ・ 1947年4月30日 県会議員選挙に出馬・トップ当選。
- ・ 1951年4月30日 県会議員選挙に出馬・第5位で当選。
- ・ 1955年4月30日 県会議員選挙に出馬・トップ当選。
- ・ 1957年12月17日 県会議長に選出。
- ・ 1960年11月20日 衆議院総選挙に自民党から第二区に出馬・トップ当選。
- ・ 1963年11月21日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1966年8月 郵政政務次官に就任。
- ・ 1967年1月29日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1967年5月 自民党県連会長に就任。
- ・ 1969年12月27日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1972年12月18日 衆議院議員運営委員会委員長に就任。
- ・ 1975年11月 弘前中央学院大学理事長に就任
- ・ 1976年12月5日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1976年12月24日 国土庁長官に就任。
- ・ 1986年10月7日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1980年6月22日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1980年7月 自民党国会対策委員長に就任。
- ・ 1981年11月30日 農林大臣に就任。
- ・ 1983年3月 東奥義塾の理事長に就任
- ・ 1983年12月18日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1984年12月 『私は今の農林水産行政をこう見る』（創造書房）出版。
- ・ 1986年4月 弘前中央学院大学学長に就任。
- ・ 1986年7月6日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1988年8月24日 防衛庁長官に就任
- ・ 1990年2月18日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1993年7月18日 衆議院総選挙に出馬・当選。
- ・ 1996年10月20日 衆議院総選挙に出馬・落選。
- ・ 1997年4月21日 政界引退を表明。
- ・ 2001年12月12日 弘前大学病院で死去、享年83歳。

出典：「田澤吉郎略年表」『田澤吉郎伝』〔弘前学院大学出版会、2005年〕、389-416頁。

院・総選挙である。竹内黎一とともに、比例代表東北ブロックに回され、名簿順位16位となり、落選したのだ⁴。翌1997年、政界を引退した。引退後は、弘前学院大学の理事長・学長に就任するなど、学校教育に専念した。1997、国政に対する長年の功績で、勲一等旭日大勲章を受け、2001年12月12日に死去した。

田澤は、青森旧第二区選出の衆議院議員である竹内黎一とともに、長らく津軽の二大派閥の領袖として君臨、県政界に大きな歴史を刻んだ。

国会審議でも大きな手腕を発揮して要職をこなし、一時は首相候補にも上ったほどである。政界引退後も、「政治は命をかけて取り組むべき仕事」である認識、自民党「党人派」として重きをなした⁵。

② 県会議員・衆議院議員

田澤吉郎は1947年、戦後第1回の県議選に南郡から民主党公認で出馬、5,984票を獲得、トップ当選を果たした。時に田澤29歳、義父である津島文治の知事就任が、田澤の県議選で

の追い風になった。実際、「津島知事は、公務の合間を縫っては南郡に顔を出し、娘婿の応援演説に立ってくれた」、のである⁶。以後田澤は、三期12年間県会議員を務め、この間、議長に就任した。

1957年12月17日に招集された県議会定例会では、議長選任問題が正式日程に上り、20日、大島勇太郎議長の辞任を承認、正副議長選挙に移り、若干39歳の田澤吉郎が議長に選出された。県議三期のなかで、最も若い田澤に落ち着いたのは、「他の三年生議員の誰を選んでもしこりが残る。当たりさわりのない田澤に押しつけたともいわれるが、田澤は陰の存在であったとはいえ、党内の実力者であることは疑いなく、今までも多くの問題のまとめ役をやってきた」、のが評価されたのである⁷。

県議会議長時代の田澤には、二つの政治的課題が生じている。一つは、1959年1月14日、自民党県連大会が開催、田澤は幹事長に選出された。だが、幹事長の田澤は現職の県会議長であり、超党派的性格を有する議長職との兼任が妥当か否か問題となり、結局、田澤は幹事長を辞任した。

他の一つは、1958年11月の県議会で、田澤議長不信任決議案が野党から提出されことである。県庁舎工事の請負契約問題などがこじれて、自民党内が分裂、議会は混迷、会議を統制する議長の不手際が問われた。不信任決議案は起立少数で否決されたものの、田澤議長にとっては苦い思い出となった⁸。

田澤は県議選を見送って、衆議院選への準備をしていた。1960年11月25日の衆議院・総選挙に、青森旧第二区から自民党の“準公認”で出馬した。田澤は5万3,909票を獲得、トップで初当選を勝ち取った。「東北のケネディ」を謳った田澤は、この時42歳、若さを発揮して、最高得票という快挙を演じて話題を呼んだ⁹。

ただ、田澤の衆議院初当選は、“津島のムコ”、前県会議長、および池田勇人首相のバックという要素がミックスして有利に展開した結果だった、といわれている¹⁰。実際、選挙戦のなかばに、池田首相が自民党県連定期大会に出席のため来青、弘前中央高校で演説して、田澤を支援した。池田は42歳の田澤に期待をかけ、派閥の資金で応援してくれたのである。義父の津島文治が娘ムコのために手を差し伸べて、手をまわしたのだ。当選した田澤は、義父と同じ「宏池会」に属した¹¹。

田澤吉郎は池田首相の薫陶を受け、若くして国政に活動の場を見出し、衆議院議員として、1996年まで一度も落選することなく12回も連続当選、派閥宏池会を継承、宮沢派の会長代行も務めた。その間に、衆議院議院運営委員長、自民党国会対策委員長として国会の舞台回しの場で力量を発揮した。

田澤は、青森県選出議員の中で、当時、4回の大任経験者としては唯一人（その後、大森理森が4回、大臣を経験）であった。田澤は、1976年、第一次福田内閣の下で国土庁長官、1981年、鈴木善幸内閣の下で、農林大臣、1988年、第一次竹下登内閣の下では、二度防衛庁長官を務めた。なお、1989年、外遊する竹下首相に代わり、首相臨時代理もこなしている¹²。

③ 農林大臣・防衛庁長官・国土庁長官

まず、農林大臣として、田澤吉郎は米価決定方式の抜本的変更を試み、米偏重農政の転機を切り開いた。実際、1982年7月13日、米価審議会が開催、政府諮問が示されたものの、生産者側は据え置き諮問を不満だとして、辞表を提出して退場した。この時、米審は残りの委員で意見を取りまとめ、7月15日、田澤農林大臣に手渡した。田澤は幹事長、党三役、および関係官僚と折衝を重ね、米価の1.1%アップを決め

た¹³。農林大臣として、農政の筋を通したのだ。

次に、竹下内閣の下では、1988年、潜水艦「なだしお」事故で前防衛長官が引責辞任、この時、田澤は“火の中のクリ”を拾う形で防衛庁長官に就任、続く同年の竹下改造内閣でも、防衛庁長官として重責を担い、事故問題の解決に尽力した。

また田澤は、国土庁長官として、第一に、第三次全国総合開発計画を策定した。三全総は、我が国の経済社会の発展に大きく寄与した。第二に、災害対策である。北海道の火山噴火、地元岩木川の氾濫など、各地で災害が発生、田澤大臣はその全てにおいて陣頭指揮を執り、住民生活の安定に努めた¹⁴。

④ 政治家「田澤吉郎」

既述のように田澤吉郎は、1947年県会議員として政界に登場、1996年に衆議院議員生活を終えるまで約50年間、自民党の重鎮として一時代を画した政治家であって、県政、国政さらに晩年は県教育界でも大きな功績を残した¹⁵。

田澤は「津軽」という政争の激しい風土の中で、同じ自民党の竹内黎一との間で、いわゆる「田澤—竹内」二大派閥の一翼を担い、首長選挙は代理戦争の様相を呈し、現在でも語り継がれているほどだ。もう一方の派閥の領袖であった竹内黎一は、田澤のことを「個人的には非常に親しくさせていただいた」と言い、田澤の政治家像を「天性の大衆性を持っていた」と評価している。一方、長く県知事を務めた、北村正哉は「田澤さんは人に対して丁寧、誠実であり、竹内派である知事の私にも派閥色、対決色で意識的な態度をとることはなかった」、と語っている¹⁶。

田澤は、おおらかな風貌の反面、「政治は命がけの仕事である」を信条に骨太の大道を歩んだ、戦後本県を代表する保守政治家の一人であった。同じ派閥であった宮沢喜一・元首相は、

「政治家」田澤を次のように評している。

「田澤さんは、情誼に厚く人の話をよく聞く人で、自分はどちらかといえば寡黙でした。ですから同士の間でも大事にされ、国会では野党からも深い信頼を受けていました。衆議院の議院運営委員長を三回もやられたのは与野党の信頼がいかに深かったかがわかります。もちろん農政に詳しく農林大臣もやられたし、国土庁長官の時には津軽の豪雨で大活躍されました。自衛隊の潜水艦“なだしお”が事故を起こした後は田澤さんが防衛庁長官として遺族の慰問や隊員の士気の向上など大きな仕事をされました。弘前学院（大学）の理事長や学長をしておられました。宏池会でも長老として私も随分助けていただきました¹⁷。

田澤の趣味は俳句である、という。早稲田大学時代は俳句研究会のメンバーで、「田澤いなほ」の俳号で俳句をたしなみ、農林大臣時代には、会う人ごとに最近作と称して、「根性と書き初めて男子盛なり」と、自分の俳句を披露している¹⁸。

3、津川武一

① 出生・経歴



(1910年8月2日~1988年9月8日)

津川武一は、民主医療の先駆者として知られており、東北で初めての日本共産党・衆議院議員、および文学者として、広範な分野で優れた

<年表>

- ・1910年8月2日 南津軽郡五郷村（現青森市浪岡）に生まれる。
- ・1923年4月 旧制弘前中学に入学。
- ・1927年4月 旧制弘前高校に入学。
- ・1930年4月 東京帝国大学医学部に入学。
- ・1931年 治安維持法違反で検挙。
- ・1932年 日本共産党に入党、治安維持法違反で検挙。
- ・1933年12月 東京帝国大学医学部退学処分。
- ・1935年1月 青森歩兵第5連隊に入隊。
- ・1937年 東京帝国大学医学部復学。
- ・1939年3月 東京帝国大学医学部卒業。
- ・1945年8月 弘前陸軍病院で終戦。
- ・1946年1月 日本共産党青森地方委員会開催、委員長に就任。
- ・1947年 弘前市に津川診療所を開設。
- ・1949年 弘前文学会結成に参加。
- ・1950年9月 村上ショウと結婚。
- ・1952年 津軽保健共同組合・健生医院設立。
- ・1955年 『農婦』読売新聞小説佳作入選。『過剰兵』サンデー毎日大衆芸賞入選。
- ・1963年4月 青森県会議員に当選。
- ・1966年4月 青森県会議員に再選。
- ・1969年12月 衆議院議員に当選。
- ・1972年12月 衆議院議員に再選。
- ・1976年12月 衆議院議員に三選。
- ・1979年10月 衆議院議員に四選。
- ・1980年6月 衆議院議員で落選（次点）。
- ・1983年12月 衆議院議員に五選。
- ・1986年7月 衆議院議員で落選（次点）。
- ・1988年9月4日 死去、享年78歳。

出典：「年譜」阿部誠也『アルバム 津川武一の軌跡』（北方新社、2002年）、119~122頁。

な業績を残した。その活動と業績は、現在でも、光り輝いている¹⁹。

既述のように、津川は1910年、貧しい農家に生まれた。1923年、旧制弘前中学校へ進学、旧制弘前高校を経て、1939年、東京帝大医学部を卒業した。大学時代に社会の矛盾にめざめ、1932年には、日本共産青年同盟に加入、日本共産党へ入党する。中国への侵略戦争に反対し、治安維持法違反で2年間（1932～34年）獄中生活を送った。その後、兵役もこなしている。

戦後の1945年、津川は、いち早く青森県の共産党を再建、翌年から県委員長を務め、労働、農民運動を指導した。1947年には、弘前市に津川診療所を開設、それを母体に、1952年、

津軽保健生活協同組合・健生病院を創設した²⁰。

津川は1963年、青森県会議員に当選、これを二期務めた。また1969年には、衆議院・総選挙に青森旧第二区から出馬、東北初の日本共産党の衆議院議員として当選、津軽に革新勢力の灯をともした。衆議院議員は都合五期13年務めあげ、津軽の革新勢力の代表として国政の場で活動した。

その一方で、津川は1955年、読売新聞小説賞佳作入選した「農婦」で文壇に登場している。『弘前文学』や『弘前民主文学』を中心に、小説、評論、ルポなどを発表、著作は単行本だけで五十数冊におよぶ。1981年、長年の創作、後進育成の活動が評価され、第二回青森県文芸

協会賞を受賞²¹、だが1988年、すい臓癌のため健生病院で死去、享年78歳であった。

以上で紹介したように、津川の全生涯の業績ともいべき三つの分野における仕事は、渾然一体となって結合、その根底に流れているのは「ヒューマニズムと社会革新」の思想と精神に他ならない²²。

② 県会議員・衆議院議員

津川武一は1953年7月、日本共産党から除名処分を受けている。しかし、1962年、除名処分が取り消された。9年前の除名処分は党の誤りであった、という条件が付されていた²³。

除名処分が取り消され、日本共産党員として名誉を回復した津川は、共産党青森県委員会から県議会議員選挙への立候補を要請される。津川は、復党したからには、党の要請に応えるべきだと考え、その申し出を応諾、県議会議員に打ってでることになった。

1963年4月17日に実施された県議会選において、津川は定員6人の弘前市・中津軽郡から出馬、6,634票を獲得、最下位で当選を果たした。時に津川53歳。その後、1966年の県議選にも出馬して当選、県議を二期務めた。

津川は県会議員時代に議会での発言で、懲罰処分を受けている。1966年6月22日、津川は一般質問の中で、大鰐町の某旅館が売春を強要しているとして、旅館名と個人名を挙げた。これに対して、自民党は津川議員の懲罰動議を提出、戒告処分にした。しかし、津川は議会を欠席、処分は次期議会で執行することになった。だが、津川は第58臨時会でも懲罰に応じなかったため、さらに懲罰が提出され、議会出席2日間の停止処分を受けた²⁴。

1969年12月2日、津川は県議会議員を辞職、衆議院・総選挙に日本共産党公認で青森旧第二区から出馬、定数3名に対して9人が立候補していた。投票の結果、第二区では、自民党の田

澤吉郎（6万0,487票）、共産党の津川武一（4万7,590票）、自民党の竹内黎一（4万5,292票）が当選、共産党が初めて衆議院議員の議席を手にした²⁵。

選挙戦では、津川は県会議員としての実績を基礎に、自分が経営する健生病院関係者を丹念に追う浸透作戦が功奏した。また、津川は単に医師としてばかりでなく、小説を執筆する文人としても有名で、津川の「個人的魅力」が多くの有権者を引きつけたのだ²⁶。

その後も、津川は衆議院・総選挙に出馬、四回連続して当選した。だが、1980年の総選挙では落選、1980年12月の衆議院・総選挙で一度カムバックしたものの、1986年7月の同日選でまたも敗退、1987年、政界からの引退を正式に表明した。国会では衆議院農林水産委員会に所属、理事を務め、また災害対策特別委員として、本県の災害復興に大きく寄与した²⁷。

③ 医師、文学者としての津川

津川武一は戦後間もなく、1947年6月、弘前市代官町に津川診療所を開設、津軽地域での診療活動を本格的に開始した。職員は医師の津川と看護婦2名からのスタートで、診療所の開設費に4万円がかかった。運営資金が不足していたので、注射器や注射針の消毒をブリキ缶の中に水を入れて炭火の上で沸騰させて使用した、という。午前は診療、午後は往診、そして夜は農村部に出かけ、医療活動を行い、昼夜を問わず働いた。津川は「医療を民衆の手に」の願いを込めて医師として実践活動を続けたのだ。

津川はこの診療所を拠点に、医療を受けることのできない労働者や農民の中に入っていった。津川診療所は、戦後民主主義の高揚と、療原の火のように広がっていた労働者、農民の組合創設運動と結びついて、それらの砦のような役割を果たした、という²⁸。

その後、津川は1952年、津軽保健生活協同

組合を組織、会長として事業に目を通し、月一回の理事会にも必ず出席した。また、健生病院院長として地域医療の向上・充実に貢献した。今からおよそ半世紀前に、津軽の地に医療の生活協同組合をスタートさせたのが、津川に他ならない。

津川は、わが国の民衆の医療運動という視点から「医療組合」の果たした役割について、その意義を正確に把握していた。それと同時に問題点も掘り下げていた。津川は医師として、「無産者診療」運動と「医療組合」運動の二つの潮流を受け継ぎ発展させ「医療を民衆の手に」のスローガンを掲げて、津軽保健生協組合を設立した、のである。

津川はこの津軽保健生協組合を土台に、1968年、弘前市に健生病院を立てた。現在、同病院は、鉄筋五階建てで、病床は345床、近代施設を有し、県内随一の民間病院として発展、津軽一帯の働く人びとの医療機関として活動している²⁹。

既述のように、津川はまた優れた作家としても知られ、文筆活動でも大きな足跡を残している。1954年に弘前文学会を組織、サンデー毎日小説賞入選、読売新聞小説賞佳作を得た。主な著作に『酒の12章』『農婦』『医療を民衆の手に』『痲癩の歌人 藤原定家』『天皇は今何を考えますか』などがある。また『津川武一日記』全10巻は貴重な現代史の資料である³⁰。

④ 政治家「津川武一」

津川武一が衆議院・総選挙に出馬したのは、かなり早い時期で、戦後第1回目の1946年4月の総選挙に既に打ってでている。この時は、全県が一選挙区で大選挙区時代であった。津川は共産党公認で立候補、1万0,409票を獲得したものの、次点第17位で落選した。津川37歳の時で、職業は「医師」と記載している³¹。

津川の衆議院議員初当選は1969年である。

途中で県議会議員の時代があるものの、永田町に至るには長いブランクがあった。23年目の正直で、本県選挙史上はもちろんのこと、東北でも初の共産党による議席獲得の記録を打ち立てた。そして、この時以来、旧第二区では、自民党の田澤吉郎、同じく自民党の竹内黎一と並んで四期連続で議席を堅持し、いわゆる「三T時代」を築き、同選挙区は“指定席”だと称された。

津川は1980年の衆議院・総選挙で、後に知事になる木村守男に敗れた。だが、1983年の総選挙で返り咲き、これが最後の当選で都合五期、衆議院議員を務めあげた。津川の政治家としての魅力は、何よりも「温容の中に秘めた闘志とそのスマイルにあった」、といわれる³²。

衆議院・総選挙で、激しく競った竹内黎一は、津川について、次のように述べている。「思想が一人の人間を動かすということがあるが、(津川氏は)その典型の一人であったと思う。思想もさることながら、一生を貫いた理念、熱源は貧しい人、弱い人、虐げられた人たちのために全身全霊を傾けたというヒューマニズムだろう」³³。

1963年、県会議員に当選して政界入りし、1987年衆議院議員を引退宣言するまで25年間、津川は津軽の大衆と共に歩む政治姿勢を貫いた、とあってよい。ことに、農業問題では、悩む農家をまわり、足で知った現状を国会の本会議の場で追及、その改善方を求めるなど、国会内では、「農業大臣」の異名さえいただくほど研究熱心であった。また、米価問題など県農業関係者が抱える難問を背負い、国会で質問し政府の姿勢を質した。

さらに津川は、本県労働者の課題である「出稼ぎ問題」にも積極的に取り組んだ。実際、1970年、東京の荒川の高架橋崩壊事故では、本県出身者の多数が犠牲となった。この時、津

川は国と折衝、補償金を勝ちとっている。津川は、「県民のための国会議員」として大きな功績を残したのだ³⁴。

4、おわりに

本章で取り上げた、田澤吉郎と津川武一は、政治家としてほぼ同時代を歩んだ。ただし、前者は保守勢力の代表として、後者は革新勢力の代表としてである。田澤と津川はともに、戦前最高学府＝大学で学び、戦後政界入りし、県会議員、そして衆議院議員として、政治の世界で活躍した。

田澤と津川は、青森旧第二区選出の衆議院議員として、総選挙で何度もしのぎを削って闘っている。そうした状況の中で、田澤は通算11回、津川は通算5回衆議院・総選挙で勝利し、県政、国政の場で各々の立場から活動、本県を代表する政治家として君臨した。

最後に、政治家としての田澤と津川の対応について、若干厳しい疑問点を提示しておこう。田澤の場合、気になるのは、一つは県会議員、衆議院議員に出馬・当選する際、岳父・津島文治・知事の助力を得ていることだ。とりわけ、衆議院議員初出馬の時は、津島の尽力で、自民党から強引に「準公認」のお墨付きを得ている³⁵。二つ目は、1996年の総選挙の際、田澤は竹内とともに、落選した時の対応である。田澤は記者団に「私が悪いんじゃない。党が悪いんだ」と述べ、「私は竹内君と二人で自民党を支えてきた。名簿順位はトップか、悪くても三番以内と自負していた。選挙で負けたという気持ちより、党に対する怒りの方が強い」と、党批判を繰り返した。しかしこの時、田澤は既に78歳の高齢に達しており、政界を引退しても何ら不思議でなかった。実際、この時の総選挙で当選した自民党新人の江渡聡徳は41歳、木村太郎に至っては31歳の若さで、“世代交代の流れ”

は避けられなかった³⁶

一方、津川の場合は、りっぱな人物であって、その言動に文句のつけようがない。あえて一つだけ、疑問を提示しておきたい。それは、津川が1953年7月31日、日本共産党から除名処分を受けたことである。確かに、1962年6月26日、除名処分が取り消され、9年前の除名処分は党の誤りであった、という条件が付されていた。

しかし、戦後青森県において共産党組織の再建に尽力したのは、津川であり、大沢久明や大塚英五郎と異なり、終始一貫して共産党員であったのは津川だけだ。これらの点を津川と共産党本部はいかに総括しているのであろうか。この除名と除名の取り消しの背景について、『津川武一日記』を拝見しても明確に触れているとはいいがたい。党の路線をめぐる対立の違いが表面化したのであろう。ただ津川は、1962年12月31日付きの日記で、次のようにこの年を振り返っている。

「何としても共産党に復帰したことである。これは予想していたことであるが、しかし、よもや県議会の候補者にされるとは思っても見なかった。・・・共産党に入ったために、幾らか人間的に強くなったかも知れないが、誰をにくみ、誰を愛すべきについては不十分である」³⁷。

津川武一の最も偉大なところは、いわば三つの顔を有していたことである。それは、「医師として、政治家として、また作家として」である³⁸。

<注>

- (1) 福士壽一「田澤吉郎」『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、404-405頁。
- (2) 福士壽一「津川武一」同上、『青森県人名事典』、436-437頁。
- (3) 『田澤吉郎伝』〔弘前学院大学出版会、2005年〕、18頁。
- (4) 「故田澤吉郎を悼む—“天性の大衆性”持

- つ』『東奥日報』2001年12月13日。
- (5) 「田澤吉郎氏が死去」『陸奥新報』2001年12月13日。
- (6) 前掲書、『田澤吉郎伝』、26頁。
- (7) 『陸奥新報』1957年12月20日。
- (8) 『青森県議会史 自昭和28年~至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕、604頁~605頁、711~712頁、前掲書、『田澤吉郎伝』、53頁。
- (9) 藤本一美『戦後青森県政治史 1945年~2015年』〔志學社、2016年〕、99~100、101~102頁。
- (10) 『東奥年鑑 昭和36年版』〔東奥日報社、1961年〕、46頁。
- (11) 前掲書、『田澤吉郎伝』、61、64~65、67頁。
- (12) 前掲書、「故田澤吉郎氏を悼む」『東奥日報』2001年12月13日。
- (13) 前掲書、『田澤吉郎伝』、222~223頁。
- (14) 同上、217~218頁。
- (15) 前掲書「故田澤吉郎を偲ぶ」『東奥日報』2001年12月13日。
- (16) 同上。
- (17) 前掲書、『田澤吉郎伝』、212~213頁。
- (18) 前掲書「故田澤吉郎氏を悼む」『東奥日報』2001年12月13日、前掲書『田澤吉郎伝』、307~309頁。
- (19) 阿部誠也『アルバム 津川武一の軌跡』〔北方新社、2002年〕、1頁。
- (20) 同上。
- (21) 同上。
- (22) 同上、2頁、www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/tsugawa_takeichi.html
- (23) 同上、89頁、120頁。
- (24) 『青森県議会史 自昭和38年~至昭和41年』、1262頁、『東奥年鑑 昭和42年版』〔東奥日報社、1967年〕、136頁。
- (25) 前掲書、藤本一美『戦後青森県政治史 1945年~2015年』、150頁。
- (26) 『東奥日報』1969年12月28日。総選挙で津川と戦い、第三位に終わった竹内黎一は次のように述べている。「津川さんの地道な医療活動を通じて、住民と触れ合う中で、彼の個人的な人気が高まっていった。決して共産党という政党が強いわけではなくて彼個人の人気が強かった」(木村良一・馬渡剛「保守王国・青森県の政治」『青森中央学院大学・研究紀要』第17号〔2011年〕、16頁)。
- (27) 「津川武一氏が死去」『東奥日報』1988年9月5日。
- (28) blogs.yahoo.co.jp/kenkan2319/63457371.html
- (29) 津川武一『増補改訂 医療を民衆の手に』〔民衆社、1977年〕、20~22頁。
- (30) 前掲書「津川武一氏死去」『東奥日報』1988年9月5日。
- (31) 木村良一『検証 戦後青森県衆議院議院選挙』〔北方新社、1989年〕、19頁。
- (32) 松岡孝一『一地方記者の記録—東奥日報とともに半世紀』〔東奥日報社、2000年〕、288~289頁。
- (33) 前掲書「津川武一氏死去」『東奥日報』1988年9月5日。
- (34) 「津川前代議士が死去」『陸奥新報』1988年9月5日。
- (35) 前掲書、木村良一『検証 戦後青森県衆議院議院選挙』、121頁、藤本一美『戦後青森県政治史 1945年~2015年』、473頁。
- (36) 「社説：21世紀に託した世代交代」『東奥日報』1996年10月21日。
- (37) 『津川武一日記 第1巻』〔北方新社、1992年〕、475頁、卓見の限りでは津川武一日記の、1953年7月には除名に関する明確な記述が見当たらない。ただ、阿部誠也は「私は不法不当にも除名された。私の妻は泣きわめいて党を非難し、党に対して感情的になった。しかし私は党を愛し党を信じ、日本の革命に希望をつないでいたので、党を裏切ったり、反党的な言説には出なかった」、と日記を引用している(阿部誠也『評伝 津川武一』〔北方新社、2005年〕、136頁、ただ、阿部誠也の『アルバム 津川武一の軌跡』には、この引用はない)。なお、1962年2月11日付けの、津川日記には「昭四郎の酒の席での発言をめぐり、ショウ(妻)は共産党の人たちに、除名について彼女が感じていたことをくわしく話す」、との記述がある(前掲書、『津川武一日記 第1巻』、429頁)。
- (38) 福沢永太郎「津川武一論」『弘前民主文学』第64号参照。

***参考文献**

- ・『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕
- ・『田澤吉郎伝』〔弘前学院大学出版会、2005年〕
- ・「故田澤吉郎を悼む—“天性の大衆性”持つ」『東奥日報』2001年12月13日。

- ・「田澤吉郎氏が死去」『陸奥新報』2001年12月13日。
- ・『陸奥新報』1957年12月20日。
- ・『青森県議会史 自昭和28年～至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕。
- ・藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕。
- ・『東奥年鑑 昭和36年版』〔東奥日報社、1961年〕。
- ・阿部誠也『アルバム 津川武一の軌跡』〔北方新社、2002年〕。
- ・『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』。(青森県議会、1983年)
- ・『東奥年鑑 昭和42年版』〔東奥日報社、1967年〕。
- ・木村良一・馬渡剛「保守王国・青森県の政治」『青森中央学院大学・研究紀要』第17号(2011年)。
- ・『東奥日報』1969年12月28日。
- ・「津川武一氏が死去」『東奥日報』1988年9月5日。
- ・津川武一『増補改訂 医療を民衆の手に』〔民衆社、1977年〕。
- ・木村良一『検証 戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社、1989年〕。
- ・松岡孝一『一地方記者の記録—東奥日報とともに半世紀』〔東奥日報社、2000年〕。
- ・「津川前代議士が死去」『陸奥新報』1988年9月5日。
- ・『津川武一日記 第1巻』〔北方新社、1992年〕。

第2章、熊谷義雄と島口重次郎

1、はじめに

熊谷義雄は、青森県の南部地方を代表し、「保守勢力」の一翼を担った自民党所属の政治家である。熊谷は1905年5月20日、岩手県に生まれ、1994年1月4日、八戸市の病院で死去した。熊谷は、戦前水産業界で活躍した実業家であって、戦後も1953年、デーリー東北新聞社取締役、1954年、八戸商工会議所会頭に就任している。1963年11月、自民党公認で青森

旧第一区から衆議院・総選挙出馬して当選、5期務めた。だが、1979年の衆議院・総選挙で落選、これを機に政界を引退した。自民党内では三木-河本派に所属した。熊谷は、八戸漁業振興協議会会長、県水産振興会会長、および八戸工業大学の初代理事長にも就任している。趣味は、スポーツ、読書である、という¹。

一方、島口重次郎は、青森県の津軽地方を代表する、「革新勢力」=社会党の政治家である。島口は1912年、弘前市に生まれ、小学校卒業後、徒弟奉公に出て、1929年、17歳の時に、社会民主党に入党、また1934年には共産党に入党している。島口は昭和初頭から、津軽地方の労農運動の先頭に立って活動してきた。

島口は戦後、全日農の再建に尽力、社会党に入党した(右派社会党)。1947年には、弘前市議と県議員に当選、県議員は三期務めた。1958年、衆議院・総選挙に出馬して当選、1960年の衆議院・総選挙では落選したものの、1963年および1967年の衆議院・総選挙で、二期連続当選を果たし、通算すると三期衆議院議員を務めた。

島口は、淡谷悠蔵、米内山義一郎と並んで、本県社会党の「黄金時代」を築いた一人として知られ、社会党県本部委員長、全日農県連会長、および弘前油脂産業株式会社社長などを歴任している。1968年3月17日、衆議院議員在任中に死去、56歳の若さであった²。

本章では、青森県旧第一区選出の衆議院議員として自民党の熊谷義雄を、また第二区選出の衆議院議員として社会党の島口重次郎を取り上げる。前者は、南部地方、特に八戸市の水産・漁業界を代表する保守派の政治家であった。一方、島口は社会党議員として、津軽地方を代表する労農運動出身の革新勢力を代表する政治家であった。

2、熊谷義雄

① 出生・経歴



(1905年5月20日～1994年1月4日)

既述のように、熊谷義雄は1905年5月20日、岩手県の下閉郡譜代村に生まれた。宮古水産学校を経て、1929年、明治大学商学部を卒業。

1932年に設立した八戸魚市場常務取締役として参加する。熊谷27歳の時で、いわば“エリート水産人”であった³。

しかし、熊谷は初めから漁業を目指したわけではない。家が半農半漁で貧しかったので、軍人を志したものの、農作業で左の人さし指を切断、軍人の道を諦めて宮古水産学校に入学した。後に総理大臣となる鈴木善幸は、熊谷の5年後輩にあたる⁴。

宮古水産学校を出た熊谷は、明治大学商学部に進学する。当時の級友に後に総理大臣となる三木武夫がいた。大学卒業後、八戸魚市場の専務となった熊谷は、後に衆議院議員となる夏堀源三郎社長のもとで敏腕を振るった。「魚市場・

<年表>

- ・ 1905年5月20日 岩手県譜代村に生まれる。
- ・ 1917年3月 譜代村立堀内小学校卒業。
- ・ 1922年3月 宮古水産学校卒業。
- ・ 1926年3月 明治大学商学部卒業。
- ・ 1932年2月 八戸魚市場取締役。
- ・ 1943年3月 南部貨物自動車社長。
- ・ 1948年11月 大洋水産社長。
- ・ 1953年8月 デーリー東北新聞社取締役。
- ・ 1954年3月 八戸商工会議所会頭。
- ・ 1956年8月 八戸ガス社長。
- ・ 1959年 青森県水産振興会会長。
- ・ 1961年3月 熊谷漁業社長。
- ・ 1963年11月 衆議院・総選挙に出馬、初当選。
- ・ 1964年 青森県漁港協会会長。
- ・ 1967年1月 衆議院・総選挙に出馬、当選（二期目）。
- ・ 1968年 行政管理政務次官に就任。
自民党青森県連会長。
- ・ 1969年12月 衆議院・総選挙に出馬、当選（三期目）。
- ・ 1972年1月 八戸工業大学理事長に就任。
- ・ 1972年12月 衆議院・総選挙に出馬、当選（四期目）。
- ・ 1976年12月 衆議院・総選挙に出馬、当選（五期目）。
- ・ 1976年1月 衆議院社会労働委員長に就任。
- ・ 1979年10月 衆議院・総選挙で落選、政界引退。
- ・ 1980年 勲二等瑞宝章を受章。
- ・ 1989年5月 八戸市特別功労者表彰。
- ・ 1994年1月4日 肺炎による心不全で、青森県八戸市の病院で死去、享年88歳。

出典：熊谷拓治「熊谷義雄略歴」『「はちのへ海の物語」より ものがたり 熊谷義雄』[1990年、尾崎印刷工業]、222～223頁。

漁業者・仲買人の三位一体体制」を目標に、マグロ船の入港や水揚げで実績を増やしていった。戦時中は、南部貨物自動車社長、八戸港造船取締役など経済人として実力をつける一方で、翼賛運動でも活動した⁵。

熊谷は、戦後の1948年、統制令違反事件の責任をとって魚市場を退社する。しかし、その後、大洋水産社長、デーリー東北新聞社の取締役などを務めた。衆議院議員となった夏堀源三郎が、“浜の大親分”なら、魚市場建設にコンビを組んで活躍した熊谷は、“浜の近代化の父”であり、秋山皐二郎・八戸市長と協力して流通、水産加工など施設充実を図った⁶。

熊谷は単に、水産・漁業界で活躍しただけでない。八戸通運、青森放送、および八戸ガスなどの会社に関連、1961年には、熊谷漁業の社長を務めた。その肩書は、都市ガス、石油、はては遊園地まで及んだ。そして1954年、49歳の若さで八戸商工会議所の会頭に就任した。一方、各種団体では、1952年、八戸漁業振興協議会会長、青森県水産振興会会長、および大水産会理事を歴任した。また、1971年には、八戸工業大学の理事長に就任している⁷。

実業界で名を売った熊谷は、政界に転身する。1963年、衆議院・総選挙に自民党公認として出馬して当選、以後連続五回当選を果たし、16年間衆議院議員として活動した。自民党内では、明治大学時代の旧友・三木武夫派（後に河本派）に所属、この間、行政管理政務次官、衆議院社会労働委員会・委員長を務めた。しかし、1979年の衆議院・総選挙で落選、後釜を現・衆議院議長の大島理森に譲った。

熊谷は、自民党県連会長も歴任、一貫して郷土発展のために尽力、八戸港湾作りに寄与した。1994年1月4日、肺炎による心不全で、青森県八戸市の病院で死去。享年88歳であった。

② 水産・漁業界の「天皇」

熊谷義雄は、八戸では“天皇”と呼ばれて畏怖された。そのあだ名は、熊谷が高踏的一面をのぞかせていたからに他ならない。こうした批判に対して、熊谷は次のように弁明している。「魚市場発足以来、ずっと役員として八戸の漁港、水産業の水準向上に情熱を傾けてきた。市場の専務から小型漁船の組合長まで36の肩書を持たされた。おまけに自分の事業というものを持たず、政治への野心もなく、仕事本位でバリバリやり過ぎた点もあるので、そう呼ばれるようになったらしい」。また、時代がそう呼ばせたとも語っている⁸。

熊谷の息子拓治（三男）は、この辺の事情を次のように述べている。いわく「八戸の政治経済界で辣腕を振った父は“熊谷天皇”と呼ばれていましたが、実は、権力に対する反骨の人生だったと思います。弱小の漁業者、地方の水産業者を守って大手漁業者の政治権力、中央・地方の官僚に牙をむいてきた事例をいくつも思い出します⁹」。

戦前・戦後を通じて、熊谷は事業に関して自分の考えを曲げずに、独断的であった。そのため、「天皇」と呼ばれたのであろう。だから、八戸魚市場の専務時代は功罪半ばの評価だったようだ、拓治は語る。「何故なら、大学を卒業したばかりの若僧が浜の旦那方にズケズケ物申すのだから反発があって当然であった。実は、熊谷の一生は事業を起こして盛況を極めたところで退陣するといったことの繰り返しだった。それも、父の強すぎる個性が招いた悲劇だったかもしれない」、と拓治は述懐している¹⁰。

熊谷は一貫して、大手漁業会社の八戸市進出を拒み、零細漁業者には支援を惜しまず、八戸魚市場に総合水産会社のような機能を増大させ、役人にへつらうことなく、視野の大きいものに熱中していった。だから、熊谷は、「天皇」という

あだ名を承知で我が道を歩んでいったのだ。

③ 衆議院議員

経済界で次第に頭角を現した熊谷に、当然ながら、政界入りの話が何度もあった。実際、1952年の衆議院・総選挙への出馬要請、また翌1953年には、八戸市長候補に推薦する話もあった。そしてついに、1963年11月の衆議院・総選挙に、周囲から推されて熊谷は出馬、当選した。熊谷58歳の時である。1960年の衆議院・総選挙では、夏堀源三郎が落選、三浦一雄ら南部地方出身の衆議院議員が相次で死去、地元選出の衆議院議員のいない悲哀を味わった八戸市の政財界が、“地元代表”として商工会議所会頭の熊谷を担いだのだ¹¹。

熊谷は、これまで市会議員、県会議員など議員経験が全くなかったのに、1963年11月の衆議院・総選挙に、いきなり自民党公認で初出馬、6万8,999票を獲得して当選した。八戸市内だけで、有効投票の過半数に相当する3万8,017票をかき集めた。経済界では、“天皇”と呼ばれた大物であったとはいえ、初めての立候補で即当選は珍しい。そこには、衆議院議員に当選すること六回の経歴を有する、浜の“御大”夏堀源三郎系の支援があったのは間違いない¹²。

熊谷は選挙が強く、四期16年におよぶ衆議院総選挙で定員4人の旧青森第一区で、常に上位当選を占め、三位以下となったことは一度もない。一区では、記録保持者であった¹³。

図表①は、熊谷が総選挙で獲得した票数と順位である。常に、6万台を維持、その大半は八戸市内の票であった。

図表① 総選挙での熊谷の得票数と順位

年度	得票数	順位
1963年	6万8,999	2位
1967年	6万7,738	2位
1969年	6万6,156	1位
1972年	6万1,701	2位
1976年	6万2,504	2位
1979年	6万0,080	(次点2位で落選)

出典：木村良一『検証：戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社、1989年〕。

しかし、連戦連勝だった熊谷も、1979年の衆議院・総選挙では、二回目の出馬をした新人・田名部匡省（44歳）の前に屈し、初めて落選の悲哀を味わった。最大の問題は、熊谷が74歳に達し、選挙民は若さを求めていたことだ。それから、「熊谷試案」とか、「いか流し網反対」も票を失う大きな理由となった、という。大手漁業資本を漁撈部門から排除すべきだという「熊谷試案」には、種々の圧力があつたし、また「いか流し網反対」についても、熊谷批判の有権者が賛成する漁民の力を反熊谷で結集していた¹⁴。港町地元八戸市で、これまで熊谷に信頼を寄せていた漁業者の支持が崩れたのだ。熊谷は八戸市で2万7,828票に留まった一方、田名部は3万3,762票獲得、7,834票の差をつけられたのが痛かった。この時の衆議院・総選挙について、熊谷自身、半年前に既に「熊谷義雄は落選だな」と吐露している¹⁵。

④ 政治家「熊谷義雄」

熊谷は1963年11月に衆議院議員に当選して、1979年10月に落選するまで、連続五回当選、この間、文教、内閣常任委員、社会労働委員会・委員長を歴任、また自民党本部では、水産部会長、基地対策特別委員長などを務めた¹⁶。

衆議院議員時代の熊谷義雄は、大学が同期であったので、三木武夫・元首相の三木派－河本派に所属、その間に、新産都市指定、また得意分野であった「水産基地」や港湾、漁港の拡充

に尽力した。とりわけ、八戸市の港湾作りに強力な牽引役を果たした¹⁷。

熊谷にとって、中小漁業者と漁業資源を守ることが生涯のテーマであり、一生を貫く信念でもあった。だから、それは選挙で勝つために目をつぶればよいというものではなかった。だから、最後まで「厳しい選挙になるが、立候補を止めるわけにはいかなかった」と吐露していた¹⁸。

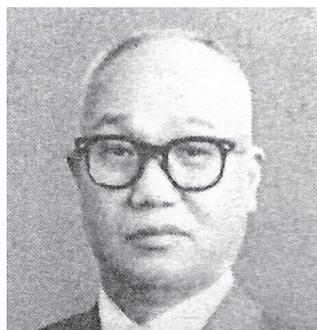
1979年の衆議院・総選挙で落選した時、自宅の戻った熊谷は、息子の拓治に語った。「多分、兄かお前に次は立候補してほしいという話が出てくると思うが、オレは絶対に反対だから。政治家は一代、政治の世襲は許さない。もし、どうしても政治家になりたかったら、オレが死んでから自分の力でやることだな」と述べて、「世襲」の二世政治家に強く反対している。そこに、「政治家」熊谷の強い信念を感じる¹⁹。

熊谷が落選を契機に政治家をキッパリと辞めたのは、有権者の判断を何よりも大切にしながらに他ならない。熊谷は「自分の時代ははっき

りと終わったと自覚した」のである。その決意は、極めて重いもので、息子の拓治は、「父は港の整備と漁業問題、新産都市建設という地元の大プロジェクト建設を果たすためにかつがれた。これが軌道に乗って、役目はもう終わった」、と総括している²⁰。その意味で、落選の時点で「保守政治家」としての熊谷の時代は終了したのだ、といわねばならない。

3、島口重次郎

① 出生・経歴



(1912年1月15日～1968年3月17日)

<年表>

- ・1912年1月15日 弘前市品川町に生まれる。
- ・1925年3月 第二大成小学校卒。
- ・1929年 社会民主党に入党。
- ・1932年 全農青年部青森県連合結成・執行委員。
- ・1933年 日本共産党に入党、検挙され懲役3年。
- ・1942年 弘前市会議員に出馬・落選。
- ・1943年 弘前一般労働組合長。
- ・1945年 日本社会党中弘支部長、中弘製縄工組理事。
- ・1946年 弘前商工会議所議員、一般消費組合長。
- ・1947年 県会議員選に出馬・初当選。
- ・1949年1月23日 衆議院総選挙に出馬・落選。
- ・1951年 県会議員選に出馬・当選(二期目)。
- ・1955年2月27日 衆議院総選挙に出馬、落選。
- ・1958年5月22日 衆議院総選挙に出馬、初当選。
- ・1960年11月20日 衆議院総選挙に出馬、落選。
- ・1963年11月21日 衆議院総選挙に出馬、当選(二期目)。
- ・1967年1月29日 衆議院総選挙に出馬、当選(三期目)。
- ・1968年3月17日 胆のうガンで死去。

出典：「県会議員略歴」『青森県議会史 自昭和21年～至昭和34年』〔青森県議会、1959年〕、996頁、『青森県人名事典』〔東奥日報、2002年〕、331頁、『青森県人物・人材リスト 2007』〔日外アソシエーツ、2006年〕、159頁。

既述のように、島口重次郎は1912年1月15日、弘前市に生まれた、生粋の弘前っ子で、戦前から農労運動の闘士であった。島口は10代から無産運動に身を投じ、1932年から1933年にかけて共産党に入党。そのため警察に勾留され、1935年には、3年の懲役を受けて獄中生活を送った。だがこの間、筋を曲げず、“非転向”で通した。しかし、共産党とは戦前に決別している。ただ、戦時中も社会主義運動から右へ踏み切ることは決してなかった²¹。

戦後、島口は社会党に入党。1947年、県会議員に出馬して当選、これを三期務めた。また、1958年には、衆議院・総選挙に出馬して当選、通算すると三期衆議院議員を務めた。この間に、日本社会党県連支部委員長、右派社会党県連支部会長、全日農県連会長などに就任している²²。

島口は衆議院議員時代、右派社会党出身ということで、国会では浅沼稻次郎系であった。衆議院・総選挙には6回挑戦、3回落選したが、3回当選を果たしている。1960年、4月8日、島口は衆議院本会議において社会党を代表して、得意の中小企業問題で質問、佐藤栄作総理大臣に対して政府の中小企業白書につき、その問題点を鋭く追及している。衆議院議員在職中の1968年3月、弘前大学付属病院において、56歳で胆のうガンにより亡くなった。島口は政治家として、終始「誠実さを貫く信念の人」であった、いわれた²³。

② 県会議員

島口重次郎は、1947年4月30日、戦後初の県議選に、弘前地方（定員3名）から出馬して3,453票獲得、第二位で当選した。また1951年4月30日の県議選では、6,648票獲得、今回は第一位で当選。さらに1955年4月23日の県議選でも、6,252票獲得、第一位で当選している。結局島口は、連続三期12年間県議を務めた²⁴。

島口は、右派社会党県議の一人として県議会で活動、当時の県知事津島文治を相手に、県議

会で激しく対決した。また、1955年4月、議長

の選出が問題となった時、島口は民主党の大島勇太郎と阿部敏雄・正副議長の選出に賛同、自由党を支持勢力とする津島知事に少なからずプレッシャーを与えている²⁵。

当時、東奥日報紙の記者であった松岡孝一は、議長選出をめぐる保守系の多数工作が進んだ時の取材で、島口の控室を取材したものの、黙秘していた島口について、「どっしりした構えに圧倒され」、「口の固い社会党議員にやられた」ともらし、戦前派“弾圧時代”の猛者を偲んでいる²⁶。

島口は県議時代、一貫して文教常任委員に所属、いわば県議会に対して県教組の窓口的役割を果たし、その功績は大であった。島口は県教組にとって結成以来の恩人だといわれ、とりわけ、教職員の定員増に対する活動は特筆されるものがあつた²⁷。

③ 衆議院議員

島口重次郎は、1958年5月の衆議院・総選挙に青森旧第二区から出馬、三度目の挑戦でようやく衆議院議員の議席を手にした。島口46歳の時である。1960年11月の衆議院・総選挙では、落選したものの、1963年および1967年の衆議院・総選挙では、連続当選を果たした。当時、本県の衆議院議員は定数7名で、社会党の衆議院議員は第一区選出の淡谷悠蔵、米内山義一郎と合わせて3名となり、本県社会党にとって「黄金時代」と呼べる時代を形成した²⁸。

図表②は、島口が衆議院総選挙に出馬した時に獲得した票数と順位である。

図表② 衆院選における島口重次郎の得票と順位

年度	得票数	順位
1949年	8,089票	落選（次点7位）
1955年	2万6,617票	落選（次点3位）
1958年	4万5,703票	当選（3位）
1960年	4万0,110票	落選（次点2位）
1963年	4万7,670票	当選（2位）
1967年	4万4,347票	当選（3位）

出典：木村良一『検証：戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社、1989年〕。

島口の得票は、約半数が地元弘前市からのものである。1960年の衆議院・総選挙の時、楠美省吾に約3千票離された以外、他の候補者を押さえて弘前市で首位を維持している。

晴れて衆議院議員となった島口は、元右派社会党だったので、国会では浅沼稻次郎らとともに活動した。だが既述のように、衆議院議員在職中の1968年3月17日、56歳の若さで死去した。死因は胆のうガンで、政治家として働きすぎが響いた²⁹。

当時同じく、社会党選出の本県衆議院議員として活動していた米内山義一郎は、「国会でも、あの人が常任委員会でこまめに、よく質問した人はいないでしょう。これは国会の議事録が雄弁に物語っています」、と述懐している³⁰。

第58回国会において、青森県旧第一区選出の衆議院議員で、選挙を戦った自民党の田澤吉郎は故・島口重次郎について、本会議場で次のような追悼演説を行っている。そこには、島口の国会における活動の一端が示されているので、紹介しておく。

「本院に議席を得られてからは、運輸、商工、農林水産等各委員会の委員あるいは理事として、じみではありましたが、常に一貫した信念と節操とを保って、真摯かつ熱心に審議に当たられ、独自の風格を備えた存在でありました。長年にわたる実践活動を通じて体得した豊富な知識と深い識見に基づき、君は、現実にも密着してもの

を見つめ、かつ現実の中から問題を適格に把握されたのであります³¹。

④ 政治家「島口重次郎」

島口重次郎は、県議時代からワラ工品関係、リンゴ関係のつながりで農村地帯に食い込み、しかも都市部では中小企業のめんどうをみてコツコツと実績を積み上げ、やがて津軽の票田に独特の“島口票”を形成、保守王国といわれた青森旧第二区において、はじめて革新系代議士誕生のクサビを打ち込んだ、「労農提携」を選挙戦で実践した政治家である³²。

国会議員として、島口は特に、中小企業問題で党本部でも一目置かれる存在であって、国会で佐藤首相や閣僚にかみついたのは有名な話である。また「津軽の後進性脱却は、経済構造を根本的に変えない限りだめ」、と津軽の“貧乏追放”をめざし奮闘した。

実際、島口自身が碎石、搾油、りんご資材などの事業を手掛け、そのため、小、零細企業の悩みと悲哀を肌で感じとっていた。だから、頭で理屈をこね回す人と違い、島口の国会における中小企業論には迫力があった³³。

島口は、単に党人というよりも、党派の色わけを越えた幅広い大衆の支持を得ており、戦前からの労農運動を通じて“信念の人”として行動してきた。島口は誰からも親しまれる人柄と円熟味を増して政治活動を行った、真の革新的政治家であった、といっていよう³⁴。

4、おわりに

熊谷義雄は戦前・戦後を通じて、八戸市の政治・経済を強力にリードした、いわば“昭和のパイオニア”であった³⁵。熊谷は水産漁業界の「天皇」として君臨、後に自民党から総選挙に出馬して当選、衆議院議員を五期務めた。政治家としての熊谷は引き際が清く、とりわけ二世議員の育成に強く反対したのは大いなる見識で

あった。

一方、島口重次郎の方は、津軽弘前市を中心に、戦前は労農運動の活動家として、戦後は県議三期、衆議院議員に三回当選した、革新勢力を代表した政治家である。革新勢力が弱体で保守王国の青森旧第二区において社会党に貴重な議席をもたらしたのは、島口の人柄と努力のためのものであろう。ただ、58歳という若さで死去したのが惜まれる。

ほぼ同じ時代に、一方では「保守勢力」を代表する自民党の衆議院議員として、また、他方では「革新勢力」を代表する社会党の衆議院議員として道を歩んだ政治家・熊谷と島口の生き様は、青森県の政治断面の一端を知ることが出来る良き事例でもある。

<注>

- (1) 渡部高明「熊谷義雄」『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、235-236頁。
- (2) 竹村俊哉「島口重次郎」、同上、331頁、「島口重次郎」『青森県人物・人材情報リスト 2007』〔日外アソシエーツ、2006年〕、159頁。
- (3) 朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部、1983年〕、62頁、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』〔東奥日報社、2000年〕、271頁。
- (4) 熊谷拓治『「はちのへ海の物語」より ものがたり 熊谷義雄』〔1990年、尾崎印刷工業〕、2-4頁。
- (5) 前掲書『青森県人名事典』、236頁。
- (6) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、272頁。
- (7) 前掲書『青森県人名事典』、236頁。
- (8) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、272-273頁。
- (9) 前掲書、熊谷拓治『「はちのへ海の物語」より ものがたり 熊谷義雄』、22頁。
- (10) 同上、14-16頁。
- (11) 前掲書、朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』、62-63頁。

- (12) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、273頁。
- (13) 同上、274頁。
- (14) 前掲書、熊谷拓治『「はちのへ海の物語」より ものがたり 熊谷義雄』、22頁。
- (15) 同上、211頁。
- (16) 前掲書、朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』、63頁。
- (17) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、274頁、前掲書「熊谷義雄」『青森県 人名事典』、236頁。
- (18) 前掲書、熊谷拓治『「はちのへ海の物語」より ものがたり 熊谷義雄』、212頁。
- (19) 同上、214-215頁。
- (20) 前掲書、朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』、64頁。
- (21) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、225頁。
- (22) 前掲書、『青森県人名事典』、331頁。
- (23) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、225頁。
- (24) 『青森県議会史 自昭和21年~至昭和27年』〔青森県議会、1959年〕、960、976頁、『青森県議会史 自昭和28年~至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕、1094頁。
- (25) 藤本一美『戦後青森県政治史 1945年~2015年』〔志學社、2016年〕、72頁、前掲書『青森県議会史 自昭和28年~至昭和34年』、265頁、前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』221、224-225頁。
- (26) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、224-225頁。
- (27) 秋元良治「島口さんの思い出」『陸奥新報』1968年3月21日、後に秋元良治『青森県教組結成覚え書』〔北の街社、1974年〕に収録。
- (28) 前掲書、松岡孝一『一地方記者の記録-東奥日報とともに半世紀』、223頁。
- (29) 同上、225頁。
- (30) 「国会活動では抜群」『陸奥新報』1969年3月19日。
- (31) 『衆議院追悼演説集』〔温智会、1983年〕、388頁。
- (32) 「島口氏の死去-県政界に大きな影響」『陸奥新報』1969年3月19日。

(33) 「島重さんさようなら－親しまれた人柄」
『陸奥新報』1969年3月19日、7面。

(34) 同上。

(35) 「熊谷義雄」『きたおうう人物伝』〔デーリー
東北社、1995年〕、304頁。

***参考文献**

- ・松岡孝一『一地方記者の記録－東奥日報とともに半世紀』〔東奥日報社、2000年〕。
- ・朝日新聞青森支局編『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版、1983年〕。
- ・熊谷拓治『「はちのへ海の物語」より ものがたり 熊谷義雄』〔1990年、尾崎印刷工業〕。
- ・「熊谷義雄」『きたおうう人物伝』〔デーリー東北社、1995年〕。

・秋元良治『青森県教組結成覚え書』〔北の街社、1974年〕。

・藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕。

・『衆議院追悼演説集』〔温智会、1983年〕。

・『青森県議会史 自昭和21年～至昭和27年』〔青森県議会、1959年〕。

・『青森県議会史 自昭和28年～至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕。

・『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕。

・『青森県人物・人材情報リスト 2007』〔日外アソシエーツ、2006年〕。

・『陸奥新報』。

(2016年10月22日・脱稿)